

**** 8月生まれの「偉人・著名人の名言」 ****

<タモリ> (1945年8月22日~)

1945年に福岡県福岡市に生まれる。本名は、森田一義。幼少時代より大人びており、お遊戯している園児達を見て、自分にはできないと入園拒否した。小学校入学まで、一日中坂道に立って人間観察を行っていた。そのため坂道好きとなり、後に「日本坂道学会」を設立している。小学校3年生のとき、下校途中に電柱のワイヤに顔をぶつけ、針金の結び目が右目に突き刺さって失明した。中学時代には、宣教師の身振り手振りや喋りが面白いからという理由から近所にあった平尾バプテスト教会に通った。福岡県立筑紫丘高等学校時代には、剣道部と吹奏楽部を両立してトランペット兼司会を担当していた。高校を卒業後、1年間の浪人生活を送った。大学浪人中は押入れにこもり、中国や韓国からのラジオ放送を長時間聴いていた。無線に興味があったため電気通信大学を目指したが、物理が克服できず、1965年に早稲田大学第二文学部西洋哲学専修へ入学した。早稲田大学在学中はモダン・ジャズ研究会に在籍し、トランペットを演奏した。トランペットは3日でクビとなり、代わりにマネージャー兼司会を担当することになった。この時期に付けられたニックネームが、森田をバンドマン読みした『タモリ』である。大学2年次に友人と旅行を計画し、学費用の仕送りを旅費に遣ってしまい、授業料の支払いが滞り、3年次に学費未納のため抹籍処分となった。間もなく叔父に福岡に引き戻され、朝日生命で3年近く保険外交員として勤めた。その後、旅行会社に転職し、系列のボウリング場の支配人となった。1972年、渡辺貞夫の福岡でのコンサートに同行していた山下洋輔トリオが歌舞伎の踊り、狂言、虚無僧ごっこなど乱痴気騒ぎをしていたところに乱入したタモリは、ゴミ箱を鼓にして歌舞伎の舞を踊り、デタラメな朝鮮語やアフリカ語を話し、山下らを呼吸困難になるほど笑わせ、「モリタです」とだけ名乗って帰宅した。1975年春には、「山下がそんなに面白いというのなら一度見てみたい」と上京させる機運が高まり、山下らにより『伝説の九州の男・森田を呼ぶ会』が結成され、同会のカンパによって、1975年6月に上京を果たした。面白いことをやっている人間がいるという噂を聞きつけた赤塚不二夫に見い出され、バラエティ番組「マンガ大行進 赤塚不二夫ショー」(1975年8月30日放送、NET)で、テレビ番組初出演を果たした。その後、大手芸能プロダクション田辺エージェンシーと契約を結び、1976年4月、東京12チャンネルの深夜番組「空飛ぶモンティ・パイソン」で正式に芸能界デビューを果たした。当時の芸は、イグアナのような体芸、反知性を打ち出した中洲産業大学教授、デタラメ言語ハナモグらなど、他の芸人とは一線を画しており、テレビ的にはキワモノ芸人的存在と考えられていた。1977年には、赤塚不二夫、滝大作、高平哲郎らと『面白グループ』を結成した。まもなく、坂田明、内藤暎、小松政夫、団しん也、たこ八郎、三上寛、研ナオコ、柄本明、所ジョージ、アルフィー、劇団東京ヴォードヴィルショーも参加した。1980年代に入ってから、「ばらえてい テレビファソラッド」(NHK)、深夜バラエティ番組「今夜は最高!」(日本テレビ系列)などで、知性的な部分を前面に打ち出すようになり、ファン層を拡大していった。1982年、フジテレビのプロデューサーの横澤彪がタモリを風の帯番組「森田一義アワー 笑っていいとも!」と「笑っていいとも!増刊号」(フジテレビ系列)に起用した。間もなく人気となり、2014年3月31日の放送終了まで31年半続く長寿番組となった。また、この時期、深夜バラエティ番組「タモリ倶楽部」(テレビ朝日系列)も放送が開始され、これもまた、30年以上続く人気番組となった。「笑っていいとも!」で司会術を磨き、1983年には「第34回NHK紅白歌合戦」(NHK総合テレビジョン)の総合司会を務めた。また、1987年4月からは音楽番組「ミュージックステーション」(テレビ朝日系列)で2代目メイン司会となり、以降、30年以上続くこととなった。1990年代以降は、趣味や知識を前面に打ち出すようになり、「タモリの音楽は世界だ!」(テレビ東京系列)、「タモリのボキャブラ天国」(タモリのジャポニカロゴス)(フジテレビ系列)、「フラタモリ」(NHK)など続々とレギュラー番組が増え、現在も活躍中である。明石家さんま、ビートたけしと共に、『お笑いBIG3』と称されている。

日常で一番重要なことを伝えるには低いトーンで小さな声でしゃべる方が伝わる。そうすると相手の注意力が増してくる。大きな声を出せば面白いと思うのは勘違いだ
今はね、友達を作ろう作ろうって言い過ぎるよ。友達なんかいなくていいんだよ
まあ、私も結構活躍してるみたいなんですけども、宇宙から見たらもうどうでもいいですね

真剣にやれよ!仕事じゃねえんだぞ!

コツはね、張り切らないこと

好きな言葉は『適当』 <中洲産業大学教授>

健康のためなら死ぬ

俺のやる事に意味なんかあるわけないだろ!

やる気のある奴は去れ

人見知りじゃない奴は面白くない

大企業が考える都市計画っていうのはどこも同じで、歩きたいような街というよりも、泣きたくなるような街だよ

ストレスはね発散することはできません。溜まる一方だからストレスを忘れるしかない

たくさん喋るんだけど、終わってみると何も心に残らない人っているよね

人間って『自分がいかに下らない人間か』ということのを思い知ること、スーツと楽にもなれるんじゃないかな

料理はリラックスして食べるものだから。緊張させるラーメン屋のオyajとかが、緊張させる頑固な寿司屋のオyajとかが、ああいうの大嫌いなんだよ



<イグアナ>

※生徒諸君には、タモリといえど司会者・MCとしての印象が強いと思いますが、私にとっては、デビュー当時のイグアナ、中洲産業大学教授、デタラメ言語ハナモグらなどの「なんだこれは!?!」という、現在の江頭2:50にも通ずる見る者に強烈なインパクトを与えるようなキワモノ芸の印象がいまだに残っています。

☺☺☺ 校長室のお宝紹介② ☺☺☺

校長室のお宝紹介の第2弾は、「手作りシーサー」です。前任校の宇都宮東高校で沖縄への修学旅行に団長として生徒を引率した際に、体験学習の一環として生徒と一緒に作ったものです。琉球赤瓦の屋根を葺く際に瓦どうしの隙間を埋めるのに用いる漆喰で体をつくり、珊瑚や貝殻で装飾し、乾燥させてからポスターカラーで彩色しました。自分としては傑作だと思っています。ホームページに掲載した「『栃高の日』新聞」では写真がカラーで見られますので、興味のある生徒諸君はそちらも見てください。シーサーは、家や人、村に災いをもたらす悪霊を追い払う魔除けの意味を持つ沖縄の伝説の獣の像で、沖縄では建物の門や屋根の上に設置されているのをよく見かけます。仏教の影響か、阿(口を開いた像)吽(口を閉じた像)一対で置かれることが多く、口の開いたシーサーが雄で向かって右側に置き、福を招き入れ、口を閉じたシーサーが雌で左側に置き、あらゆる災難を家に入れたいといわれています。私が作ったのは、福を招くといわれる口を開いた雄のシーサーで、次に沖縄に行く機会があったら、災難を家に入れたいといわれる口を閉じた雌のシーサーを作りたいと思っています。

